

第2回府中市学校適正規模・適正配置検討協議会の開催結果

- 1 日 時 令和4年11月16日(水) 午後1時30分～午後3時
- 2 場 所 府中市立教育センター2階 第2会議室
- 3 出席委員 11名
- 4 欠席委員 1名
- 5 出席職員 赤岩教育部長、矢ヶ崎教育部次長、佐伯学務保健課長、
角倉学校施設課長、菅原指導室統括指導主事、遠藤学校施設課長補佐、
崎井学校施設課副主幹、田中学務保健課係長、七里学校施設課主査、
榎本学務保健課職員
- 6 傍聴者 1名
- 7 内 容
 1. 開会
 2. 第1回協議会の会議録確認について
 3. 議題
 - (1) 児童生徒数・学級数の推計と将来推計
 - (2) 学校施設の築年数等
 4. その他
 5. 閉会
- 8 配布資料 第2回府中市学校適正規模・適正配置検討協議会 次第
府中市学校適正規模・適正配置検討協議会第2回協議資料
第1回府中市学校適正規模・適正配置検討協議会の開催結果

会議録

【事務局】

皆様こんにちは。定刻となりましたので、ただ今から「第2回府中市学校適正規模・適正配置検討協議会」を開催いたします。それでは、会長お願いいたします。

【会長】

皆様、こんにちは。お忙しいなかご出席くださり、ありがとうございます。それでは、ただ今から、第2回府中市学校適正規模適正配置検討協議会協議会を開催します。

なお、本日の会議の予定ですが、概ね1時間から1時間半程度を目途に進めていければと思いますので、ご協力のほどよろしく申し上げます。

はじめに、事務局に確認しますが、本日の傍聴の申出の状況はいかがでしょうか。

【事務局】

本日の傍聴希望者は1名でございます。

【会長】

今、ご紹介にありましたように傍聴者1名の申し出がありましたので、許可することに異議はありませんか。

《委員からの「異議なし」の声》

それでは、事務局は傍聴者を会議室の中に案内してください。

【事務局】

準備が整い次第、入室をしていただくように指導しているところでございます。

【会長】

次に、委員の皆様の出席状況について、事務局から報告してください。

【事務局】

本日は1名欠席との連絡をいただいております。欠席の委員からは後程ご説明いたします本日の議題について、ご意見をいただいております。タイミングをみて事務局が代表してご意見をお伝えさせていただきますのでご了承ください。

なお、出席委員数が過半数に達しておりますので、本日の会議は有効に成立しております。

【会長】

今日は1名委員が欠席ということですが、発言の要旨が事務局の方に届いているということで、後ほど審議の時に適宜事務局からご紹介いただくというようにしたいと思います。ありがとうございました。

【会長】

次に、前回会議録の確定をしたいと思います。既に委員の皆様には事前に送付していますが、何か修正等の連絡が事務局にありましたか。

【事務局】

会長とほか1名の委員より、ご自身の発言内容について文言の体裁に関する訂正をいただいております。

以上でございます。

【会長】

委員2人から訂正要請があったようで、それを踏まえて少し表現上の訂正があったようです。

それでは、本日、前回会議録を確定し、今後、事務局において市政情報公開室や市のホームページ等で公開することとします。

なお、本日、机に確定した会議録を配布しておりますが、黄色く着色している部分は、委員個人を特定する表記が含まれていますので、公開時には削除いたします。

続いて、お手元の次第に従って議事を進めますが、はじめに、事務局から資料の確認をさせていただきます。

【事務局】

それでは確認をさせていただきます。

本日は、会議次第、前回会議録のほか、後ほどご審議いただく議題に関連資料といたしまして、

資料 府中市学校適正規模・適正配置検討協議会 第2回 協議資料
を配布しております。

なお、事前に送付した資料をお持ちいただいている場合は不要な資料があると存じますので、協議会終了後、机に置いたままにしていただければと思います。

これらの資料につきまして、不足等はありませんでしょうか。

【会長】

それでは、本日の議題に入ります。

はじめに、次第の3「議題 児童・生徒数と学級数推計、学校施設の築年数等」につ

いて事務局から説明をお願いします。

【事務局】

それでは資料をもとにご説明いたします。前回は初回ということもあり、事務局側の説明が多くを占めてしまいましたので、今回の説明はできる限り簡潔明瞭にしていきたいと考えております。

それでは協議資料をご覧ください。

今回、児童・生徒数、学級数の現状と将来推計、また、学校施設の築年数等についてご説明いたします。これからご説明することは2年前の協議会での推計から見直した点も含まれております。学校の現状を様々な数値を用いて、ご説明しておりますので、それを踏まえたくうえで、学校の置かれている状況等をイメージしていただき、実際の状況と多少異なっていたとしても、自由にご発言いただければと思います。今回の会議は、委員の皆様より様々なご意見をいただく場になるような発散型の協議会にできればと考えております。

それでは、3ページをご覧ください。近年の児童生徒数の傾向になります。

来年度の入学予定者推計値も含めた小中学校入学者である小学1年生と中学1年生の10年分の傾向になります。小学校は全体的に減少傾向にあり、今年度から来年度は140人ほど減少する推計が出ております。中学校はこの10年間を切り取ると全体的に増加傾向にあるといえますが、このまま数年は2,000人前後で目立った大きな変化は出ないという推計値も出ております。

4ページをご覧ください。

3ページでご説明した小学校1年生の学校別の入学者数を今年度と来年度で小学校別に比較した表になります。緑色に色塗りされた大規模である一小、二小を含む5つの学校では入学児童数が増加する推計となっておりますが、大半の学校17校は減少し、特に武蔵台小学校は1年生のクラス人数の上限である35人より少ない26人であり、1学年1学級となる推計が出ております。

5ページをご覧ください。

同様に中学校の入学者について今年と来年の比較ですが、来年増加する学校が5校。減少する学校が6校と減少する校数は多いものの、増加人数が多い推計となったため、全体で45人ほどの増加が見込まれます。

6ページをご覧ください。

児童生徒数推計に関わる資料になります。中央に表がありますが、左側が前回2年前に推計した際の令和4年4月1日時点の0歳・1歳児の人口になります。右側が実際に産まれた0・1歳児の人口となり、新型コロナウイルスの感染拡大による影響等で推計値と実績値でそれぞれ500人前後の乖離が発生しております。このように前回協議会

の推計値はあくまでも推計による値のため、誤差が生じておりますので、様々な要因を考慮したうえで、最新の動向を踏まえた推計を行ってまいります。

7ページをご覧ください。

児童生徒数・学級数推計の値を導き出すための手順になります。

こちらで用いられているコーホート要因法は人口学において同年に出生した集団で「自然増減」と「純移動」という二つの人口変動要因それぞれについて将来値を仮定し、それに基づいて将来人口を推計する方法となっております。

人口推計一番左にありますのは基準となる今年の人口となり、これをベースに上の方の右へ伸びる矢印にある生残率を組み合わせます。生残率とは1年後に生存する確率を示したものになります。下の右に伸びた矢印では直近5年間の府中市への転入・転出データから純移動率を組み合わせます。純移動率は1年間の市への転入と市からの転出を表した割合になります。そこに女性人口から算出した出生率を組み合わせます。出生率は出生数の人口に対する割合になります。さらに直近6年間の傾向から市内公立小学校に進学した児童・生徒としなかった児童生徒の数から導き出した就学率と学級あたりの最大児童生徒数を組み合わせることで計算しております。

8ページをご覧ください。

左のグラフが前回推計値と実際の出生率の乖離を表したグラフになり、右のグラフは前回推計値と実際の純移動率の乖離を表したグラフになります。実際の出生率は前回推計時の仮定値を大きく下回っていたため、調整を行いました。純移動率は年によってばらつきがありますが、仮定値を下回る年が多くなっています。

9ページをご覧ください。

左側にあるのが出生率の調整についてですが、前回推計の仮定値から今回推計の仮定値に変更しております。右側にあるのは純移動率になりますが、直近5年間の社会移動率の平均から今回推計した仮定値に変更しました。

10ページをご覧ください。

近年は社会情勢としてもコロナ前の生活様式を徐々に取り戻しており、今後は新型コロナウイルスの感染拡大前の出生率に徐々に戻っていくことが予想されますので、それを踏まえた推計を行いました。

各小学校における今年度と6年後の児童数、学級数の推計結果になります。昨年市でまとめた適正規模適正配置の基本的な考え方において、今から6年後の学級数が検討に入るためのきっかけとなる数字になっているかがポイントとなります。令和10年2028年の学級数推計をご覧くださいと定義で示した全体で31学級以上と1学年1学級以下となる学校が散見され、検討対象になる学校が複数存在していることが分かります。全体の児童数も6年間で約2,400人減少する推計が出ております。学級数にお

いても37学級減少する見込みとなります。

11ページをご覧ください。

10ページ同様、各中学校における今年度と6年後の児童数、学級数の推計結果になります。中学校におきましても検討に入るポイントとなる、全体で25学級以上と1学年2学級以下となる学校があり、中学校全体で約40人減少し、3学級減少する見込みとなっております。

それから補足としまして、学級編制の人数につきまして、現在のコロナ禍において少人数学級の拡大等の話を取りざたされることがございます。小学校の35人学級について方針は定まっているものの、中学校における国や都の動向は決定しておらず、将来的に少人数学級がどのように進んでいくのかは未定のため、現在の学級編制基準に基づき協議していただきたいと考えております。

12ページをご覧ください。

前回推計結果との比較表になります。左側に令和4年の実績値、真ん中に前回の6年後の推計値、右側に今回推計値となります。前回推計と比較しますと大規模校の児童数は減少するものの、大規模校のままで、小規模校も小規模校のまま、全体的に減少が見られます。

13ページをご覧ください。

中学校の前回推計との比較になります。前回と比較して6年後はわずかに増加する推計ですが、ほぼ変わらない結果となっております。

なお、これらの数字はあくまで推計ですので、今後の出生率の増減や府中市の流出入者の増減、新たなマンション開発計画などにより影響を受けるものです。特に10年、20年先といったある程度先の将来推計についてはもちろん、それらの要因で、今回のようにたとえ1年・2年後に推計を出し直した場合でも、大きく数が増減することもございますので、ご承知おきください。

14ページをご覧ください。

ここから先は学校施設の築年数等の情報について参考資料として掲載しております。前回会議で委員よりご要望のあった築年数についてまとめております。こちらについては、参考としてご覧いただければと思います。

15ページ、16ページは校舎と体育館の築年数をまとめたものになります。

なお、17ページでお示ししている児童・生徒一人あたりの運動場面積について、一人当たりの面積が狭いことが課題という話ではなく、この値がバランスよく整えられている環境が理想となり、理想的な環境に近づけるためにソフトとハードの両面から対応方法を考えていく必要があるものの、この協議会ではソフト面からアプローチしていき

たいと考えております。

18・19ページをご覧ください。

本日のご説明をまとめたものですが、おさらいさせていただきます。主だったものとして、児童生徒数の現状としては、来年度小学校の入学者は140人ほど減少し、中学校は増加傾向にあり2,000人を超える予定です。

将来推計としまして、小学校は今後6年間、一小、二小が大規模校、武蔵台小が小規模校となることが予想され、市全体の児童数は6年間で約2,400人減少することが推計されます。前回推計と比べると小規模校の小規模の割合が進むことが予測されます。中学校は今後6年間七中と十中が小規模校となることが予想され、市全体の生徒数は6年で約40人減少すると推計されます。

府中市立学校施設の築年数等に関しまして、校舎は概ね40から60年経過していることと体育館は小学校では築50年以上、中学校では30～40年となっていることお伝えしております。

以上、簡単ではございますが、資料の説明とさせていただきます。
説明は以上となります。

【会長】

ありがとうございました。まず、事務局から説明があった児童・生徒数・学級数推計と学校施設に関して、ご質問はありますか。

前回も児童・生徒数・学級数推計のご説明を頂きましたが、今回はさらにコロナ感染の影響を受けて国全体の出生率も下がって、子どもの数が80万人を切るという、当初の想定よりも8年～10年くらい早く出生率が低下するという傾向もあり、調整を加えて頂いた数字だと思います。前回の数値よりもかなり正確に出されているかと思いますが、質問、確認ございませんか。

【委員】

少しでも疑問があったことは質問させていただきたいと思います。

前回の協議会の資料も頂きまして、あれは2年前の時点での資料ですので、古いのは当たり前なのですが、頂いたデータが平成28、29年あたりの数字でスタートするのはどうなのだろうと思ったのですが、新たに最新の情報を出してくれて本当にありがたかったなと思います。前回の資料では、10年後ということで令和12年の予測数字が出ていたものですから、今回の資料はなぜ令和12年ではなくて、令和10年の推計にしたのかなという質問です。

2つ目は、6ページの前回予測の数字は、先程の2年前の協議会の資料の予測でございましたけれども、その基となった予測はいつの予測なのでしょう。2年前に予測した時の数字ではないですね。

【会長】

ありがとうございます。2つ質問が出ておりますけど、事務局の方でお答えできますか。

【事務局】

ご質問に答えさせていただきます。初めにご質問にありました、前回は令和12年であったのになぜ今回が令和10年だったのかという質問ですが、2年前の協議会におきましては、まず推計値を出すというところからスタートしております。その時点で10年後である令和12年の値を求めてから、協議を進めていく中で、6年後の学級数、児童数が課題になっていくと定義づけております。そのため、その当時令和2年から令和8年の値が問題になるとことで当時の協議会は終了しています。今回は既に6年後というのをターゲットに推計値を出しており、令和4年の6年後である令和10年の推計値をお示しさせていただきます。

【事務局】

前回の協議会は、令和2年7月20日から全体の協議会を始めさせて頂いているのですけれども、その時点で令和2年の4月1日付、もしくは5月1日付の児童生徒数をもとに資料作成などを行っています。今回は、令和4年度の実際の児童生徒数を出しているのですけれども、実は令和2年度の協議会の時にも令和2年、3年、4年と1年ごとに推計値を出しており、令和2年の当初に使った推計の令和4年度の数字を前回の資料には出していないのですが、今回の資料で、当時推計していた時点でのものを今回示させて頂いているところです。

【委員】

そうしますと、令和2年4月1日の推計ということで受け取ってよろしいでしょうか。

【事務局】

はい。

【委員】

細かい所ですけれども、15ページの小学校、中学校の建物の築年数のところですが、ご承知の通り、学校はいくつかの棟からできていると思いますけれども、この数字は子供たちが最も居る普通教室の代表的な棟を捉えるのか、その学校の中で最も古い棟を捉えるのか、分かりづらかったです。ここは最も古い校舎と捉えてよろしいでしょうか。

【会長】

学校の場合、色々な棟の改築が含まれているので、どういう基準でこの年数が出てい

るのかということですよ。

【事務局】

この表につきましては、各学校の普通教室を含む棟のうち、築年が最も経過しているものを抽出しております。

【委員】

逆に言うと、学校によっては、全ての棟がこの築年数ではなくて、比較的築年が浅いものの中にはあるということは想定しながら検討するということがよろしいですよ。

【会長】

よろしいですね。ありがとうございました。

【委員】

詳細な資料作成ありがとうございます。今の委員の質問のところで、自分の出身小学校は第五小学校で、築年数は56年になっているのですけれども、新築して56年ということでもよろしいですよ。というのも、私が在学中に落成しているはずだったので、学校が出来上がったのは35年前くらいの感覚なのですが、それは改築だったということですか。

【事務局】

五小の棟に関しましては、一番古い棟が昭和38年に建築されたということで、築年数が56年ということになります。

【委員】

ありがとうございます。五小はとても56年経っているとは思えないような綺麗な学校なので、疑問を持ちました。

【事務局】

申し訳ございませんでした。五小で言いますと東側の棟が昭和38年に建設されたものになります。西側の棟の方が昭和62年の建築となっております。南側の棟が昭和40年の建築とバラバラになっています。

【委員】

ありがとうございます。私の在学中に、落成記念をやったものですから、全面新築したと子供たちも先生も思い込んでいると思います。非常に丁寧な工事で全部が新しいと思うくらいです。あと、資料の読み方のところで専門的な言葉があったので質問になってしまうのですが、純移動率は、プラスの数値であるときはずっと府中市の人口が増え

続けるという解釈でよろしいでしょうか。

【事務局】

ご質問ありがとうございます。あくまで移動だけを考えると、要は転入、転出の関係で、プラスだと転入超過という形になります。一方で自然増減というものがあって、その差し引きで人口は増える・減るということになります。

【委員】

わかりました。ありがとうございます。

【会長】

以上、よろしいですか。今の質問で、学校の建物については確かに15ページで注として、築年数というのは各学校の普通教室を含む棟のうち、築年が最も経過しているものを抽出しており、そこを基準としているのですが、学校全体から見ると、全ての棟ではないことに留意して議論していきたいと思えます。お二人の質問で、そこを正確に把握する必要があることを確認できたのでありがとうございます。

今日提示されたデータはこれから審議していく上で非常に重要なベースになるので正確に確認して、共有するというのは大切な作業ですので何か疑問点や質問があればこの際、出していただいた方が良くと思います。他にございませんか。

【委員】

細かい所ですけども、資料の12ページ・13ページの所のそれぞれ右上に大規模校、小規模校の学級数の目安が書かれているのですが、目安については色々な基準、文科省の定義や府中市の定義などがあつたと思うのですが、どれを基準にしているのでしょうか。微妙に違ってくると思えます。

【事務局】

12ページの大規模校の適正規模の定義は、こちらは府中市の定義で、大規模校は25学級以上、標準規模校が12～24学級、小規模校が11学級以下の定義になっております。

続いて13ページなのですが、訂正が必要な箇所がございまして、中学校の大規模校は19学級以上となります。申し訳ございません。標準規模校が12～18学級、小規模校が11学級以下という定義が府中市で定めている定義になります。25学級以上を19学級以上に訂正お願いいたします。

【委員】

府中市の定義で進めていくということですね。

【会長】

府中市の定義は文科省の基準がベースでしたよね。

【事務局】

文科省の方では、標準規模が12学級から18学級と文科省が定義しているのですが、府中市は前回の協議で、18学級から25学級までの学校が多い状況であるため、府中市では独自に小学校は18学級から24学級までを標準と定めています。中学校は12学級から18学級になります。

【会長】

他にいかがでしょうか。

事務局から説明があったように、小学校、中学校全体の児童生徒数の減少傾向が続く中で、大規模校はより大規模校化する、小規模校はより小規模校化する、という状況が続くような将来見通しが出てきていると思います。そうした点をどのように認識していくかということと、もう一つは、そうした状況に対してどう考えていくかということに関して、皆様の方からお考えや意見、ないしは、事務局の方に対して質問があれば出していただければと思います。いかがでしょうか。

先程、今日欠席の委員の方が文書で発言を通知しているということなので、事務局の方からそれを紹介して頂いても構いませんけれども、いかがでしょうか。

【事務局】

はい、では欠席の委員からいただいている意見をご紹介します。資料でいいますと17ページのところです。

学校間格差の是正をするにあたり、一人あたりの●●（運動場といったもの）を平準化するという考え方は、あまり現実的でないように思います。たとえば、資料にある一人あたりの施設設備面積を一時的に平準化しても地域ごとの人口減少の傾向や人口移動によってすぐにバラついてしまいます。教育環境を平準化するにしても、一人あたりの●●という考え方は難しいのではないのでしょうか。

合わせてご説明させていただきます。全体としましてどのような学校であれ、一定の問題は生じる（＝学校がもつリスク）ことや、学校が小規模化することで問題や課題が生じる（＝小規模化のリスク）という2つのリスクに対して、小規模化した学校で対応できるかどうかを検討する事が重要と考えます。縮小していく学校に、これらのリスクを回避・解決できる余裕（冗長性）を担保できるかどうか、という視点です。

3点目、最後の意見になるのですが、こうした視点に立つと、市全体が保有する教育資源は分散させるよりもある程度集約した方がよいのではないかと思います。

たとえば特別なニーズのある児童生徒への支援という点を考えると、小規模校で小さなクラスで指導するよりも、ある程度の規模のある学校で支援員を複数配置した方がよい場合もあります。教員の業務量という点でいえば、学校規模・学級規模が大きくなる

ことで負担が増える場合もありますが、スクールサポートスタッフ等を適切に配置することで、効率的に処理することができるかもしれません。

何らかの方法で学校が冗長性を持つことができる規模を保障する必要があると思います。

他方で、教育委員会の支援能力との兼ね合い、つまり市が管理する学校数と、指導主事や教育委員会事務局職員の事務量のバランスを考えることも必要だと思います。極論ですが、学校数を減らした分、潤沢に専門的な人材を雇用する（市の指導主事を増やす）といったこともリスクに対応する一つの方策だと思います。

以上が欠席の委員から意見になります。

【会長】

はい、ありがとうございました。学校の適正配置等々を考える際に、こういったアプローチも必要なのではないかという一つのご意見かと思えますけれども、皆様の方でいかがでしょうか。

【委員】

私は前回からの協議会から参加させて頂いておまして、小規模校、大規模校の基準については文科省の基準等いろいろと挙げて、前回の委員会で決をとって、府中市ではこの基準でいきましょう、ということで決まりましたよね。協議会で設定した数字です。

同じ府中市内で大規模化・小規模化が起きているということで、地域をグループ分けして、そのグループの中で改善できないか考えていきたいと思いますというところまでは前回の協議会で決めていたと思います。

私の子供が大規模校として名前が挙がっている二小出身なものですから、大規模校の弊害を感じていたのですけれども、最近、知り合いの方から相談を受けて、その小学校では学級崩壊しているとのことで、一部のクラスで授業を乱すということがあるそうです。私も小学校4年生くらいのときに同じようなことがありましたが、次の年にそのコアのメンバーがクラス替えでバラバラになったことが一つ解決の方法でした。知り合いの学校は2学級だからクラス替えで別れようがないのです。人間関係が上手くいっているときは良いのですが、関係がこじれた時に小さい社会では、なかなか解消しないということもあるので、小規模校のデメリットにはこのようなことがあるのだと感じました。

大規模校の人が小規模校の余っている教室に行けば良い、何なら何学級かスクールバスで移動させたらいいのではとも考えたのですが、小学生は徒歩何分以内でなければならないというものを前回の基準で決めています。また、何らかの形で校舎というのは資源として有効に活用しながら何かうまいことできれば良いと思います。

また、単純に学区を変更すればよいと素人は考えるのですが、前回の協議会では、血が流れるよと、学区を変えることは相当難しいことと指摘されたので、その解決策を、皆さんで発想を出し合って、あれでいいのではないかと、これでいいのではないかとということ議論出来たらいいのではないかと思います。

【会長】

今、委員の方から出たような、小規模校・大規模校のそれぞれにメリット、デメリットがあると思うのですが、それぞれの問題を出していきながら、解決にはどのような方策があるのかということ、今後さらに具体的に詰めていきたいと思います。今日と次回あたりは小規模校・大規模校それぞれのメリット、デメリット、実際の府中の色々な学校の情報も事務局の方から出して頂きながら、その問題を解決するにはどのような方策が必要なのかということ、順次議論していきたいと思います。今日は是非、今発言されたような小規模校・大規模校それぞれのメリット、デメリット等々に関して日頃感じていることや、学校現場の校長先生の方、お二人ともたしか大規模校だと思いますけれども、その状況も少し出していただきながら議論をしていきたいと思いますが、どうでしょうか。

【委員】

非常に大事な所だと思いますけれども、そちらの方に行きますと時間が経ってしまいますので、その前に推計について質問をさせていただきます。具体的には8ページです。これはやはり、今後、議論をしていく中で一番大事なところだろうと思います。7ページの方は中々理解するのが難しいと思いますが、8ページの方はグラフがあり、分かりやすいです。出生率の乖離というのはたぶん8ページのグラフのようなのだと思います。最初予測を1.4としたのだけれども、これはこのまま行くと1.2ぐらいで推移していくのだろうなどと考えると、出生率は大体の予測ができると思うのですが、移動率は、この平成30年や令和3年に伸びています。平成30年頃というのは大きなマンションとか、大きな住宅だとかそういうのができてグッと伸びたのでしょうか。それから、令和元年は下がって、令和2、3年は伸びていますが、特に大きなマンションができた覚えはありません。新しい住宅がどんどんできているとか、そういう理由でこのようなグラフになっているのでしょうか。私も気になって歩き回ってみたのですが、武蔵野台駅の周りは畑がずいぶんあり、そういうところにマンションができる可能性はあるのかなと思いました。大きなマンションあるいは住宅ができる、グッと伸びると思います。今後、府中市にはそういう予定はあるのでしょうか。前は武蔵台小学校のところに警察病院がありましたし、あの辺に大きなマンションができる見通しはないのですかという質問があったと思うのですが、大きなものができる、あるいは空き地がある、畑があるとグラフがどう推移していくのかなという気がいたしまして、このグラフでは平成30年にグッと上がっていますが、これはどこかの住宅とかマンションとかができたのでしょうか。ここ1年グッと上がっていますが、定住者が増えているのでしょうか。

【会長】

事務局の方、8ページの変動の要因を説明していただきたいです。今後そういう変動が想定されるような地域開発等々の動向も把握されているのかも含めてご説明できれ

ば助かります。

【事務局】

8 ページの純移動率の乖離についてのご質問にご回答致します。実績値の方が平成29年から伸びて令和元年から下がっている件ですが、これにつきましては事務局の方で調べてはいるものの、特に大型のマンションが建ったとかそういった話はないのですが、この年はたまたま転入者が多かったとか転出者が多かったとか、その年の特徴が表れたグラフになっていると判断したところでございます。

【委員】

はい、そうですね。特に最近、ここ5、6年で大きな団地ができた、大きなマンションができたなど私自身も感じておらず、自然とこれぐらいの変化はあるとうことですよね。その現象についての理由は分かりました。

そうしますと、6 ページに戻りまして、前回の推計の令和2年4月1日に推計されたという数字と実績がどうしてこんなに違うのか素朴な疑問としてあります。大きなマンションもできてないとなると自然減少だけで、こんなに令和2年で予測したものと乖離があるのかと驚いています。予測と実際と1000人以上違ってきているという様な数字を見てびっくりしています。違ってきた大きな原因は、以前推計されたときの、確かに出生率が1.45というかなり高い数字でしたので、出生率が1.22でしたら、それだけでこんなに減ってしまうのでしょうか。それともマンションとかそのようなものができる予定が、できていないからこんなに大きな違いができているのでしょうか。

【会長】

事務局の方で何かご説明できますか。考えられるのはコロナの影響でこの数年間、全国で20万人ぐらい子供の数が減っており、その影響と考えるのが一番ではないでしょうか。

【事務局】

ご質問ありがとうございます。我々も確実な理由は分かっておりません。回答されたようにコロナの影響かなとは思っています。8 ページの出生率は、あくまで2020年の出生率で、2020年はちょうどコロナが始まった年で、この時に生まれているということは、コロナの影響が半分しか入っていないのです。その状態でもこれぐらい落ちているので、この後2021年、2022年とコロナの影響で更に出生率が下がっているのではないかと我々は思っています。6 ページにあるのはまさに2022年に0歳から1歳の子供たちですので、2021年もしくは2022年に生まれた子供たちの数になります。そのため、おそらくコロナだろうと我々は仮説を持っています。

【会長】

今後の出生数の推計は難しいですよ。先ほど事務局の方ではおそらく何年かするとコロナ前に回復するといった話ですけれども、どういった形で終息するのか見通しが出来ません。あと、色々な社会要因を考慮にいと、出生率が今後増えていく可能性は、おそらく国レベルで色々探りながら考えていくことだと思っておりますが、なかなか難しいと思います。ただ、今話し合いがあったように、6ページの極端な0歳1歳の子供の減少というのは社会的な要因が背景にあると思いますけど、中々試算は難しいですよ。他にいかがですか。予定の1時間は過ぎていますが、もう少し議論はしたいと思っております。

【委員】

細かな所でどう動くかというのは社会的な都市計画とかも関係してくると思うので一概に言えることではなく、国策として東京から地方への移住もあるので、全体を見越していかなくてはいけないので、その議論を深めても難しい面もあるかと思っております。ただ、全体的に俯瞰させていただくと、私も自治体の教育委員会に居たときに自分でやりながら思ったのですけれども、例えば、小学校の入学児童数が2083名となっています。このグラフは直近10年間を見ているのですが、入学者が2083名という時代は、昭和30年代とか40年代ぐらいの規模まで落ちるかもしれないということです。また、6年間で児童の数が2400名減少するという事は、年間400名絶対数が減ることであり、よく冷静に考えると一つの小さな学校が丸ごとなくなっている、毎年一つの学校の分が減っていくという規模で問題が動いていることとして捉えていく必要があると思っております。

先程あったように、私も前回の協議会で少し説明しましたが、大規模校は先生方に大変苦勞を掛けるけれども、メリットもあると思っております。ただ、小規模校はなんとしても対応しなければならない状況が生まれてきます。今ははじめとか色々なことがあろうし、小規模校になる学校が見えている以上、前回の協議会も踏まえて、やはり武蔵台小については積極的に議論を開始し、具体的に、例えばグループで、学校連携でこの学校を違う学校に統合するとしたらどうやって統合させるとか、移行期間はどうか、また、親御さんの立場に立つと、どの時期にどうするのか早めに教えることが最も大事な事だと思っております。実際に通われる子供たちから、特に低学年はどうやって登下校するのか、部活動の後に、どうやって帰るのかということの議論に大人たちがエネルギーを使う必要があると思っております。問題が目に見えているので、そこは逃げないでやっていく必要があるのだと思っております。

ここは一つ余談ですけども、例えば武蔵台小から児童が仮にいなくなったとしても、地域の核として残す方法はいくらでもあると思っております。その時に校舎を全部残して地域で使いましようという自治体があるのでありますが、建築的に申しあげるとそれはかなり不可能です。建築的な寿命という意味では、60年とか65年、長寿命でも80年とか言われている時代に、築年数が60年近くの施設を長寿命化したとしても、そう

何百年も長生きするわけではないです。

余談に余談を重ねますけれども、建物の解体をためらう自治体がありますが、解体をネガティブにとらえないでほしいです。燃料費もすごく高騰しており、解体するにはすごくエネルギーを使います。あるいは人の手がかかります。産業廃棄物も色々出ます。その費用を将来世代にツケとして回すことはせずに、今の世代で何とかして使える校舎を残してリニューアルをして、地域として使いたいのはこういう事で使いたいと決める。もっと大事なことは、建物を内輪だけで使うのではなくて、学校の敷地というのは非常に大きな空地なので、これを単にデベロッパーに貸与するというものだけではなくて、地域の公園や広場みたいな形で使っていくというように、もっとポジティブに、地域のコミュニティの確保を本気で作り出すモデルとして活用できればと思います。もっと積極的に次の世代が活躍できる場をどう作っていくのか、という議論を進めていくと非常に楽しいなと思います。

もう一つ余談で言うと、学校の体育館も一つの建物なので、60年くらい経っていると思うのですが、建て替える時に提案させていただきたいのは、小さな学校については、ステージを低床型にできると思います。日本の建築設計では必ずアリーナに対して1メートル高く設計するのは常識的として決まっていますけれども、法律で決まっているわけではありません。あれは単に下に大量のパイプ椅子を入れなくてはいけないから、建築屋としては非常に合理的に収納できるスペースとして作っています。学校の先生が子供を管理するためには、1メートル高いところから見下ろさないと見えないと思いますが、総勢で400名しかいない小学校を建て替えるのであれば、子供達も体育座ではなくスタッキングチェアに座らせ、スタッキングチェアは縦型に収納し、どんどんバリアフリー化してほしいです。松葉杖の子でも車椅子の方でも、敬老会で使おうが、最終的に学校が統廃合になって体育館だけ残ったとしても、地域の防災所、避難所として使う時にステージが1メートル高いと使いづらいので、できれば高くても50センチぐらいに抑えて、低床型のステージの体育館を作ることができれば、非常に使い勝手がいいです。また、バリアフリー構造でスロープを作れますので、体育館を資産として地元を提供していく形を見せながら、体育館を改築していくといいのではないのでしょうか。大変余談になりましたけど、発散させていただきました。

【会長】

将来的な、中長期的な見通しも含めて、意見をいただきまして、非常に重要な視点だと思います。ありがとうございます。残された時間があまりありませんが、他にいかがでしょうか。

【委員】

学校施設の現状の中で、17 ページですが、児童生徒一人当たりの運動場の面積がわかるのですが、平均的な面積は小学校と中学校では面積が違うと思います。小学校の場合、平均的な運動場の面積はどれくらいなのか、中学校の場合はどれくらいなのか説明

していただきたいです。

もう一つは校舎の問題ですが、校舎の築年数は概ね40年から60年となっていて、体育館は多くの小学校で築50年以上、中学校では築30年から40年という風になっているわけですが、耐用年数はどれくらいと考えたらいいのか、ご説明をいただきたいです。

【会長】

事務局の方、データをお持ちですか。運動場の面積については国の小中学校の設置基準というのがあるのですけれども、一人当たりの面積として大体どれくらい保有するのが適正か、関係するようなデータというのはございますか。今お答えできなければ、調べてもらって次回の協議会でご説明いただくということによろしいですか。

【事務局】

小学校の設置基準というものが文科省の方から出ており、児童240人までは2400㎡、そこから児童が増えると一人当たり10㎡ずつ増やしていくという基準があります。

【事務局】

2点目の校舎と体育館の耐用年数について、日本建築学会が示している、建物の耐用年数を参考にしまして、概ね60年から65年程度で建て直しをしていきたいという考え方で、学校の改築計画を作成しています。

【会長】

面積等々の学校設置基準ありますよね。重要な資料なので、次回の協議会で資料として提出できますか。宜しく願いいたします。

【委員】

1回目の時の資料で、本協議会の論点案というのをいただいており、小規模校大規模校の問題の洗い出しではなく、小規模また大規模であることにより実際に生じている問題を調査・分析します、とありますが、この認識は、要は小規模校の問題、大規模校の問題を洗い出すことはしないという認識でいたのですけれども、どういう認識で論点を理解したら良いのかわからなかったのが一点目です。

それと、小中学校で実際に起きている問題の分析ということで、令和二年度の方針をホームページで見させていただいて、その中で各校の校長先生にヒアリングされていると思うのですが、ぜひ継続的にヒアリングをしていただきたいことに加え、できればPTAもしくは保護者もヒアリングの対象に入れてみてはどうでしょうか。

それからもう一つ、今の資料だけでなく前回の資料になってしまうのですが、グルー

プ分けで、小学校でこの先に爆発的に増えていくのは市中心部のグループ1、2、3ですね。そのため、グループ分けでその各校を分散させたのは分かりますが、小規模校は市の外延部に沿っているわけです。何が言いたいというと、私は市の西の方に住んでいるので分かるのですが、学区を変更するときにはいつも市の中心部から始めており、言い方が良くないかもしれませんが、そのしわ寄せは市の外延部に影響します。学区を変更するなということではありません。学区を変更して学校を適正な規模にしていくことは当然だと思います。前回の協議会の話在先程されたときに、府中市は他のまちと違って、学区をいじるのは血を流すくらいだという話があったと思いますが、もうそんな時代ではありません。西府のエリアも新しい住民が圧倒的に増えています。私が仕事をしている、市役所のあるエリアも新しい住民が増えています。そのため、いきなり「明日から学区を区切ります」は流石に乱暴すぎだと思いますが、学区を適正に変更するという方法が一番行いやすいことなのかなと思うので、それは迅速にやっていくべきであり、さらに、市中心部と外延部の小規模校と大規模校を分ける考え方も必要になってくるかなという意見でした。

【会長】

今後の検討の進め方の上でご意見をいただいたと思います。今日はもう時間がないので、踏み込んだ意見交換はできませんが、小規模校、大規模校のメリット・デメリットがありますが、これからの全体的な見通しについて触れると、全体として児童生徒数が減る中で、小規模校・大規模校の課題はどうしても数値化されて可視化していく面があるのですが、やはり小規模校・大規模校の問題・課題を具体的な事柄を通して洗い直すという作業を続けていく必要があると思います。中には関係者のヒアリングをやってほしいという要望もありましたので、事務局に相談しながら組み込んでいけたらと思っています。そういう事をベースにしながら、どういう方向で具体的な対応策を考えていくのかという点では、前の協議会において、グループの中で検討してみて、そこだけで解決できない場合にはグループの外も含めて考えるべきだという手順の方向性として出ておりますが、その手順でいいのかという意見が委員の方から出ているので、具体的な検討をする際に前回の協議会の基本的な考え方のステップを踏んでやっていくのか、違うアプローチでやっていくのかを議論していきたいと思います。前回の協議会の基本的な考え方を踏まえると、まずグループ化してそのグループの中で解決できるのであれば、グループ内で解決を図り、解決できない場合にはグループを超えた大きな枠で考えるという手順を提示しています。委員の意見ではそういう事ではなくて、中心の方にある三つの大きな学校から考えるというのも一つのアイデアじゃないかというご提案かと思いますが、それはそれとして面白いアプローチの仕方だなと思います。具体的な検討をする際に、もう一度検討してみてはどうだろうかと思っています。

次回以降は、小規模校・大規模校のメリット・デメリットがあると思いますが、それを踏まえながらも、これからのことを考えると、問題・課題を具体的に則して意見交換できたらいいのかなと思います。その際に留意すべきことは、ただ大規模校・小規模

校の問題を議論することも大切ですが、重要な視点は、これからの学校教育において児童生徒にどういう学力をつけさせるのか、どういう子供に育ててほしいのか、その際にこれからの学校教育ではどういう取組が期待されているのか、どういう取組をしなければいけないのかという議論は外せないと思います。そういう新しい取組を進めていく際に、小規模校ではこういう問題があるのではないかと、大規模校ではそういう問題があるのではないかと、というように、これからの学校教育の新しい取組という議論をかませながら、小規模校・大規模校の問題・課題を整理する必要があるのかなと思います。個別最適な学びと協働的な学びをどうやって連携しながら新しい学力をつけていくか、そういう議論を考えながら、小規模校の問題・大規模校の問題を整理する必要があります。そういう議論ができる資料を事務局で作っていただければと思います。他に次回への要望含めて皆さんの方からご意見があれば。

【委員】

今、会長がまとめてくださった方向でいいかなと思います。大規模校の方も議論するのもいいのではないかと話もございますけれども、そこでも関連してくるものとして、一小と二小は1、2年増え続けて、その後減っていくことが考えられます。今、一小も二小も一年生が6クラスあります。私の経験から、一小は見ましたのでイメージがありますけど、二小にどうやって6クラスを入れるのでしょうか。5クラスが丁度いいですね。

クラス数が増えれば音楽室だとか図工室だとか家庭科室だとかで、コマ数に対して教室が足りているのか。教室の不足を防ぐために校庭の隅にプレハブを建てる等の状況になっているのか、まだまだゆとりがあるから心配しなくていいのか、協議会とは別個に非常に心配しているところなので、知りたいところです。

【会長】

次回以降、そういうことも含めて当事者がいらっしゃるので、そういうお話も出していただきたいと思います。私の希望とすれば、できれば小規模校も大規模校も協議会で実際の学校を見たいという気もあります。実地を見るということも大切だと思いますので、事務局の方でご検討いただければと思います。今、委員がおっしゃったことも含めて、次回そういう情報を共有しながら議論できるようにご配慮いただければと思います。校長先生のお二人は、次の会で学校の事情をお話しして頂ければと思います。他にいかがでしょうか。

予定した一時間半を少し超えてしまいましたが、今日色々なご意見をいただいて、次回以降の方向性が見えてきたと思いますので、本当にありがとうございました。今日の審議はこれで終わりたいと思います。ご苦労様でした。

【事務局】

事務局から1点だけお伝えさせていただきます。次回、第3回の協議会の確認でござ

いますが、1月下旬から2月上旬に開催予定とさせていただきます。日程につきましては、決まり次第、開催日の一か月前を目安にご連絡いたします。

以上でございます。

以上